

素材の強調から生まれる遠近法

モダニズム絵画は、1826年あるいは1839年の写真術の誕生によって触発され、出発したと考えられます。写真の出現により、絵画の存在基盤は揺さぶられ、画家は「絵画とは何か」という根源的な問いに向き合わざるを得なくなりました。とりわけ写真との差異をどこに見出すかという探求が続けられ、その解答は主として素材の特性、その違いに求められてきました。印象派から抽象絵画に至る歴史は、まさに素材自体の特質を強調する試みの連続であったと言えるでしょう。

一方、平面上に奥行きや空間の感覚を生み出す遠近法は、写真を含む平面芸術に共通する表現であり、透視図法、空気遠近法、色彩遠近法などの種類があります。しかし、カラー写真の登場によって写真でも色彩遠近法が可能となり、遠近法に関して絵画固有の領域はほとんど失われていきました。モダニズム絵画が抽象表現主義、ミニマリズム、さらにはスーパーフラットへと展開し、平面性を強調する潮流が生まれた背景には、絵画独自の遠近法が発見困難となった状況が一因としてあったのではないのでしょうか。

私の作品は「筆、インクと紙のためのドローイング」「鉛筆削り、色鉛筆と柿渋紙のためのドローイング」「金属筆と紙のためのドローイング」の三つのシリーズから成り立っています。

いずれも、筆、色鉛筆、金属筆など、線の太さが徐々に変化する素材によるドローイング作品です。筆による線は、インクを含ませた直後が最も太く、やがて細り、最後にはかすれて消えていきます。一方、削って尖らせた色鉛筆や金属筆の線は、描き始めが最も細く、徐々に太くなります。

このような素材固有の変化を伴う線を反復することで、画面上にそれぞれ独自の新たな遠近感が立ち現れます。

このように、絵画の基盤である素材の強調から生まれる、いわば「素材のためのドローイング遠近法」は、新たなモダニズム絵画の可能性を示せるのではないかと私は考えています。

高島進